

古代にもあった関ヶ原の戦い 「壬申の乱」はこうして起きた (第4完結編)

《大海人陣営側は、大海人皇子を正当な皇位継承者として大海人^{おおきみ}大王と呼んだ。以降大海人側の人物の会話は、大海人大王と書くこととする。しかし、近江の大友陣営側の人物にとっては、それは認めることができないことであるため大海人皇子と呼んでいた。》

1 序章

壬申の乱で大友皇子^{おおともの み こ てん じ てん のう}（天智天皇の長子・注1）の最大の悲劇は、中臣鎌足^{なかとみのかまたり}（注2）の死後、彼のような優秀な軍師を抜擢しなかった父親、天智天皇^{てん じ てん のう}（注3）に原因がある。当時、倭国の皇位継承権の慣例では、現天皇の兄弟が長男より優先されていた。従って、大海人皇子^{おお あまの み こ}（天智天皇の実弟）^{（注4）}が次期天皇になれば万事円満に治まり「壬申の乱」などは勃発しなかったはずである。各地の有力豪族も大海人皇子が即位するものと思っていたにちがいない。当時はまだ大和朝廷の全国の豪族に対する支配力も弱く、分権連合国家の様相が色濃く残っていた。したがって、主従関係の弱い各地の王にとっては、実の息子であっても皇位継承権すらない大友皇子が、天皇になるための布石として何の相談もなく勝手に太政大臣^{だ じょう だい じん}（注5）に任命されたこと自体が不満であった。

それに中央集権化しようと試みた天智天皇（もとの中大兄皇子）の志はよいが、協力した豪族たち側からしてみれば白村江の戦いで戦費を費し、戦いによって人材を失った豪族に対して朝廷からの補填が何もなく、すべて協力した地方豪族の自己負担にさせられたこと等々に数々の不満を募らせていた。「壬申の乱」が起きた時期に、もし、中臣鎌足

が生きていたならば、世の中の空気を読んで戦争という最悪の手段は採らなかったに違いない。

大友皇子はまだ若い。焦らなくとも天皇になる機会は後々十分あったはず。ここで戦って大友皇子を死なせてしまえば、天智天皇の思惑がすべて水の泡になってしまうことが、どうして側近は見通せなかったのか。側近は軍師^{（注6）}の役割であり、イエスマンでは天皇の亡き後を託せない。例え先帝の「戦いの指示」や、遺言があったとしても、その時々的情勢を見極め、自らの判断で戦いを回避することを選択する決断力を持ち、先帝のやりたいことの真髓を理解できる者でなくてはならない。あえて先帝の指示に従わない勇気を持ち合わせていなければならない。指示待ち人間やイエスマンでは軍師は務まらない。中国の三国志時代の蜀の王、劉備に仕えた諸葛孔明^{しよ かつ こう めい}を思い出してほしいものである。

天智天皇の男子の実子は一人しかいない。ここは何があっても大友皇子を死なせてはならなかった。ここに近江朝の軍師不在という弱点^{（注7）}の所以がある。

——「賢人は不忠に似、大奸は忠に似る」という言葉がある。人はうわべだけで見てはならないという戒めだ。この原典は中国の『宋史呂誨伝』にある。「大姦は忠に似、大詐は信に似る」である。過去において中国や朝鮮で滅びた王は、この言葉のように国事より遊興を好み、これを戒めない側近を重用している。滅亡した国には自らの本性を隠し、王に国事を顧みさせなくしてしまう側近（大奸）が必ず存在している。歴史は繰り返すのである。

後に、天武天皇^{てん む てん のう}（大海人皇子）を継いだのは、第

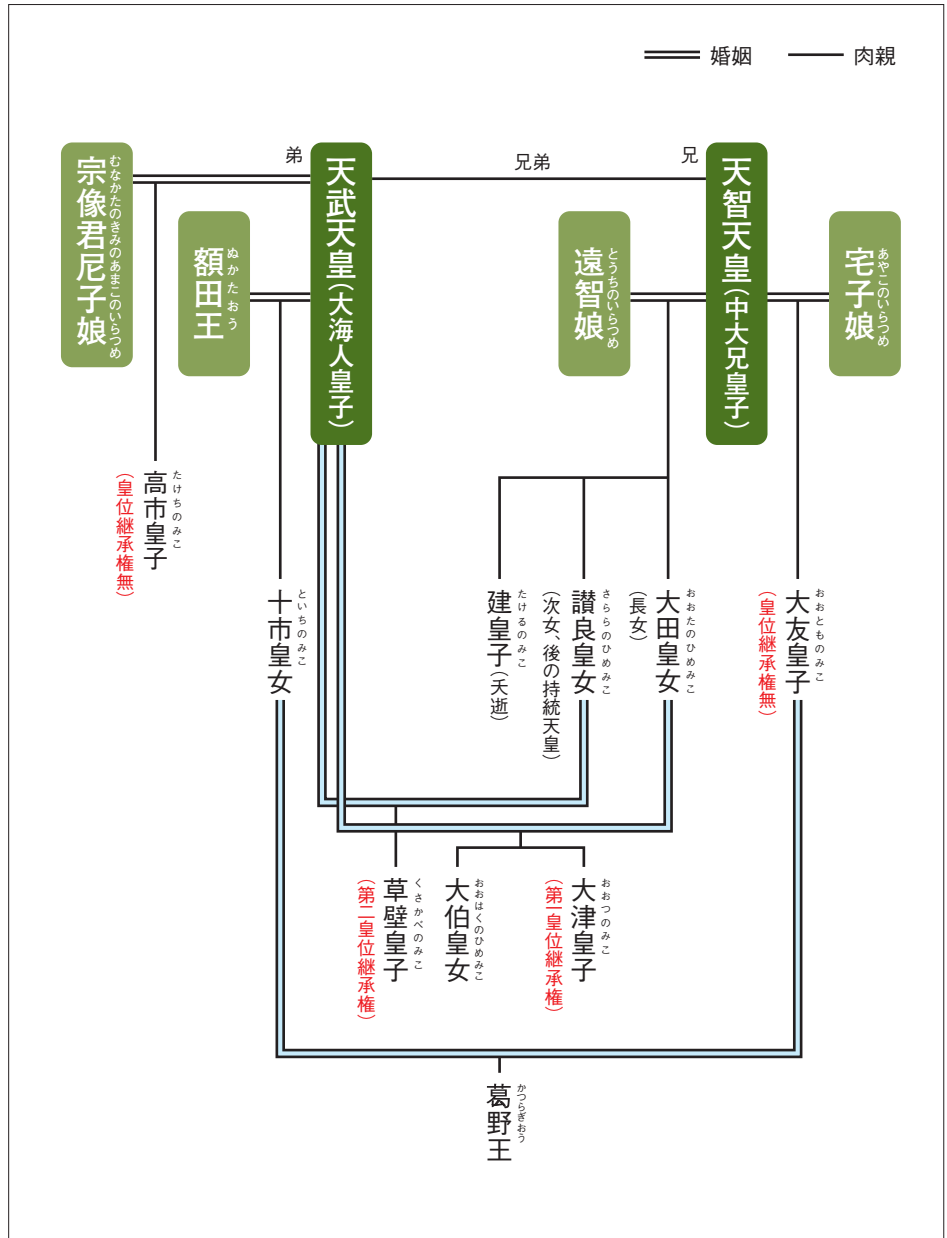
一皇位継承権のある大津皇子(天智天皇の長女大田皇女の長男)でも第二皇位継承権をもつ草壁皇子(天智天皇の次女讚良皇女の長男)でもなかった。二人ともすでに死んでいたのである。(この時の天皇家親族の複雑な相関関係の系図は2013年7月刊の第1編を見ていただきたい。)結果論かもしれないが、このような事態になる可能性を考えておくべきであった。

したがって、やむなく天武天皇の皇后である讚良皇女が持統天皇として即位した。このとき大友皇子が生きてさえいれば、即位する可能性は十分にあった。讚良皇女の実子は草壁皇子のみ。讚良皇女は、草壁皇子を天皇にすべく、第一皇位継承権のある大津皇子を反逆の罪に陥れる策略を弄していたのである。残念ながらその草壁皇子が天皇になる前に病気で死んでしまったことは、讚良皇女にとって大変な誤算であったにちがいない。

そのとき、母違いの兄弟である大友皇子を彼女が天皇に推挙すれば、当時、天皇家の武力に敵う有力豪族はすでに存在しなかったので、慣例には反するが大友皇子を天武天皇の養子とし、彼女がその後盾となれば、豪族たちは大友皇子が即位することを承諾したろうと推察する。

けれども結果としては、当時の側近は戦いに消

図1 天皇家系図



極的だった大友皇子を無理やり担ぎ出し「壬申の乱」で死なせてしまった。天智天皇の思惑もこれで万事休すである。側近は云われるがままに忠実に実行していればよいというものではなく、自らも考えていなければ務まらない(現代でもイエスマンの方が責任を取らなくて済む)。また、大友皇子は天皇になれなくとも「駄目で元々」なのである。

古代にもあった関ヶ原の戦い
 「壬申の乱」はこうして起きた
 (第4完結編)

——まるで晩年の太閤秀吉をみているかのようだ。秀吉は黒田官兵衛があまりにも優秀な軍略家であったため、彼が家康に近づくことを恐れていた。近づけば豊臣家にとって将来災いになるかも知れないと危険視していた。それをいち早く悟った官兵衛は、自らの身の危険と黒田家を守るため、若くして家督を実子の長政に譲り自らは隠居してしまった（黒田如水）。もう諫言する者は誰もいなくなった。それからというもの秀吉は権力におぼれだし、賢人がどんどん離れていった。後は皆様ご存知の通り豊臣家滅亡という悲劇となった。

秀頼はまさしく両親が生み出した悲劇を自身に受けてしまったのである。家康はこの軍師不在の豊臣家の弱点を、うまく捉え立ち回った。「賢人は不

忠に似。^{だい かん}大奸（家康）は忠に似たり」を実行したのである。家康は教養において農民上がりの秀吉に比べ、学問には秀でていたため、この兵法を十分に心得ていたであろう。自らはあくまで豊臣家を立てるふりをして、裏では有力大名と縁戚関係を結び、着々と自らの存在感を大きくし親密な大名の数を拡大させていった。そして大坂城西の丸に入って国政を掌握した。これに対し石田三成が反旗を翻したのである。

当時、淀君は豊臣家の存続より自らの自尊心を重んじ、華々しくいさぎよい死を選んだ。しかし華々しくいさぎよい死に様など有り得ない。それは単なる自己満足に過ぎない。実に愚かどしか言う他はない。

前田利家の妻、「まつ」は自らの自尊心を棄て、お家のため人質として家康に従った。そのおかげで前田百万石の礎^{いしづえ}ができ、前田家は明治まで大大名として存続したのである。

大友皇子の側近である蘇我赤兄^{そがのあかえ}が、左大臣という地位に固執せず、一旦総退陣をして時代の行方を見極めるだけの能力と見識があれば、時代の流れは変わっていたかもしれないと思うと、実に残念の一言に尽きる。トップに立つ者は、自分の亡き後どういう権力構図になるかの見通しができなければならない。

前号（第3編／2014年1月刊）で親類や身内が実子にとって一番危険な存在になると書いた所以はここにある。

対立する両派に担がれ、最期は死か放逐の運命が待っている。結果は良きにつけ悪きにつけ、親の責任である。

図2 壬申の乱 両陣営と主な戦場



蘇我氏の親類縁者たちの泥沼の権力闘争を思い返してほしいものである。権力とは、それほど魅力的なものなのであろうか？

天智天皇にだけ従順である愚かな当時の重臣たちは、天智天皇の本来の意図を汲み取る能力と見識がなく、単純に扱いやすい一人息子の若い大友皇子を、次期天皇にして自らの権力を守るために、国情など考慮せず私利私欲で動いたのである。まさに「本性を隠した大奸」である。大友皇子にとっては、大海人皇子は妻である十市皇女の実父であり自分の伯父にあたる。大友皇子にとってはこんな悲しい戦いを戦う気にはまったくならなかったし、天皇になる気もなかった。中臣鎌足が生きていれば。例え天智天皇の指図であっても、こんな愚かな戦いは必ず避けたであろう。どうしても戦いをする事情があるとすれば、天智天皇の存命中に仕掛けなければならない。

〈大和戦線の戦い〉

大海人大王軍第三軍を任された大伴吹負^(注7)は、当麻の戦いで近江軍の大野果安^(注8)と壱岐韓国^(注9)に大敗北を喫した。そもそも大伴氏は古来より物部氏と同じく朝廷の警護を担当し、武力でもって朝廷に仕える家柄であり、戦闘能力は優れていた。なぜこのような大敗北を喫したのか。原因は吹負の驕りである。

吹負側の兵力5百に対して、近江軍はその6倍の兵力を投入していた。多勢に無勢、いくら大伴の兵が強いからといっても勝てる道理がなく無茶である。吹負は功を焦り、勝利の一番乗りを大海人大王に見せたかったのであろう。戦後の朝廷での大伴氏の地位を有利にしたいがためである。この焦りの結果、相手の力量を見定めることなく力攻めをしたのである。これがまさに裏目にでた。吹負は大將さえ射止めれば、相手が多勢でも指揮系統が混乱し暴走すると読んでいた。

しかし、ここに誤算があった。吹負はこのように言い放った。

「皆の者、近江軍の大將は大野果安と壱岐韓国である。我が左翼部隊長の三輪高市麻呂將軍^(注10)は近江軍の大將である大野と壱岐の顔を知っている（三輪は敵將二人と近江朝内で面識があった）。この戦は短期決戦でしか勝てないだろう。

よって2百の騎馬隊は、雑魚の兵には決して取り合わず、三輪將軍の後を一条乱れず敵大將目がけて突き進め！機動力を活かすのだ。わしは、お前たちが追い込んできた大將を歩兵3百で当麻の湿地に追い込み殲滅するつもりだ。よいか、長期戦になれば敵のほうが有利になってしまう。狙うは大將のみぞ！わかったか」

「おお～」

兵たちの士気があがった。

「三輪高市麻呂頼んだぞ」

高市麻呂は、

「大伴の武力のおそろしさを見せ付けてくれるわ」と雄叫びを上げ、清滝街道を進軍してくる近江軍に対して左翼に馬を走らせた。その後を騎馬部隊2百が続いた。続いて吹負は、

「よし、我々は清滝街道の右翼に移動する。大將の傍には必ず軍旗持ちがいる。わしが指示するから雑魚は相手にせず大將だけを狙え。仕留めた者には地位も褒美も存分に取らせるぞ」

しかし、第3編（2014年1月刊）で書いたように、近江軍も飛鳥に貯蔵してある武器、弾薬、兵糧米を取り戻すべく精鋭部隊を送り込んできていた。吹負の思惑以上の速さで、近江軍に吹負軍の背後と真横を突かれ、逆に大敗北を喫してしまった。吹負自身が戦場から離脱するのが精一杯の有様であった。

近江軍側からみれば、天智天皇が対外戦争のため備蓄していた武器、弾薬、兵糧米の奪還こそ重要と考

えての精鋭部隊の出動であったはず。よって、このまま進軍し飛鳥を奪還すべきであった。しかし、肝心の現場の将軍がこの任務の重要性を理解しておらず、軍の損傷を恐れた結果、大伴の家来荒田赤麻呂にまんまと欺かれて退却してしまったのではないかとはいへない。たいへんな失態である。どのようにして欺いたのかは、第3編(2014年1月刊)に詳しく書いた。読みなおしていただきたい。

この時点で武器・弾薬・兵糧米を大海人大王軍が手に入れたことは、勝利が確定したも同然である。なぜなら、武器・弾薬・兵糧米が不足すれば、当時としては簡単にはそれらを調達できる訳がない。よって近江軍は長期戦に備えられず、攻撃力の弱体化は免れない。

一方、吹負は第二軍が伊賀、名張を進軍しているはずであるので、救援を求めべく必死で馬を走らせた。飛鳥を占領され、武器・弾薬・兵糧米が近江軍の手に落ちれば、この後の大海人大王軍全軍の作戦全般に関わってくる。なんとしてもこの失

態を挽回せねば大海人大王に処断されることは間違いない。吹負は自らが招いた失態を挽回すべく焦っていた。本来、彼は第二軍の到着を待つべきであった。この大和戦線の後半戦の大逆転は、前号の第3編(2014年1月刊)に書いたのでお読みいただきたい。

2 近江戦線の大進軍

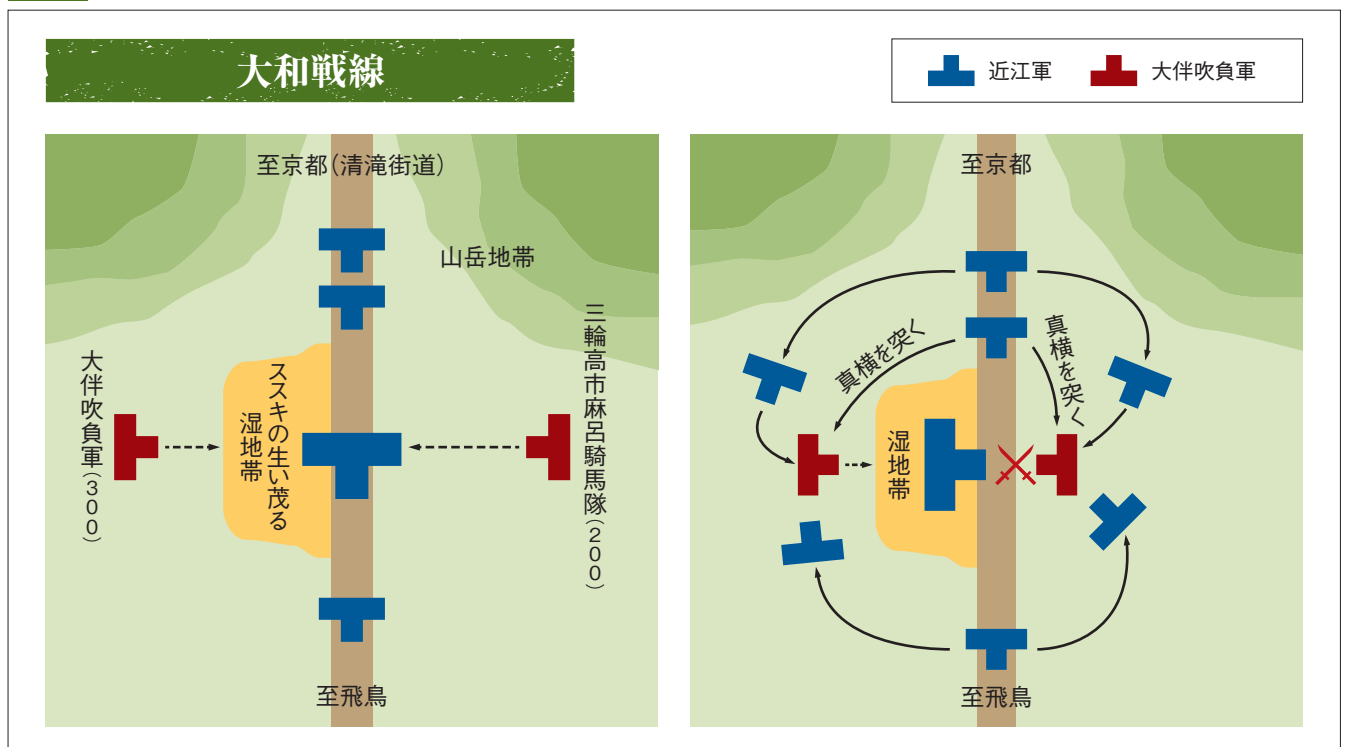
〈安川畔の戦い〉

大海人大王軍の主力部隊は、高市皇子^{たけちのみこ}(注11)全軍総司令官のもとに、ちょうど安川(現在の野洲川)あたりを進軍していた。

古代の安川は、今より2キロほど南を流れていた。玉倉部の戦い・息長横河の戦い(犬上川畔の戦い)・鳥籠山の戦いと順調に近江軍を打ち破ってじりじりと近江朝のある大津に近づいていた。

大和戦線も第二軍の救援軍の到着で勝利した

図3 大和戦線陣形図



との連絡を受けていた。日和見で戦況を傍観していた各地の豪族も、戦後の自らのお家存続のため大海人大王軍に馳せ参じてきていた。呆れるほど要領のよい連中である。

村国男依大將軍は、

「高市皇子様、近江軍は弱すぎますな。これでは、箸を折るようなものです」

しかし、高市皇子総司令官は険しい顔をして、

「男依よ。油断は禁物じゃ。利で動くものはすべて利で裏切る。しかし、恩義でもって近江軍に味方している者は、けっして裏切らぬ。敵の大將は犬養連五十君(注12)である。この男変った輩で、近江朝でも身の程をわきまえぬ奴と役人どもから嫌われていた。そして、いろいろな讒言ざんげんが天智天皇に届けられたが、それでも天智天皇は犬養五十君を可愛がっておられた。なぜだと思うか、男依？」

男依は、

「さあ～????????」

「五十君は、純粹で自分自身に正直な男だ。奸人うかが(役人の一部)は天智天皇の顔色を窺って発言をコロコロ変える。冠位の上下(肩書き)のみで人に対する態度を変える人種である。天皇は仙人ではない。いろいろな立場の人間の意見を聞き、最終判断は天皇自らが下してはじめて国は成り立つ。役人が嫌う人物こそが重要なのだ。

舟も一方からの風では対岸に押しやられて進めぬではないか。多方面からの風をうまく操れないと天皇という職は務まらぬとよくおっしゃっておられた。五十君は一匹狼である。役人に媚を売らず、出世など自己満足にすぎぬと一蹴する人物であった。まさにこういう非常時にこそ一番頼りになる男とわしは思う」まさに戦国時代の秀吉の軍師、竹中半兵衛(注13)のような人物である。男依の顔色が変わった。

「高市総司令官有難うございました。この安川の戦いで近江朝がその五十君を大將として起用してきたのは、大友皇子も彼の実力を認めている証しで

ございましょう。

とかく役人は、一人ではなにもできない輩やから。できる者に嫉妬し、出る杭を打とうとする傾向にあります。すでに大半の文官は義を棄て近江朝に見切りをつけ、近江を脱出しているそうでございます。近江朝が危ないと思えば、冠位の力など何の役にもたたぬとわかる役人には、もうこちらに情報提供して擦り寄って来ておる者もおります。女々しい輩ですなあ。ああ。これは関係のない話をいたしましてすみません。司令官!」

「ところで男依、五十君という將軍。彼は国随一の軍略家だ。こころしてかかれ」

「高市皇子のご忠告、この男依、肝に命じました」

敵は安川の対岸に横に陣を張っている。敵兵力はおよそ1万5千。我が方は3万。兵の数から言えば勝てる勝負である。しかし、戦場ではなにが起こるかわからないとするのが歴戦の武将の心得である。

男依はさっそく軍議を開いた。敵は川べりに布陣している。

「斥候(忍者のごとく様子や情報を探る役目の者)の報告に拠りますと、酒が振舞われている(実は水であった。五十君は兵に酔って浮かれているフリをさせていた。斥候の動きもすでに読まれていたのである。)そうであります」

「何!この男依をたわけにしおって!明日は目にものを見せてくれるわ。見ておれ」

男依はこの時点でもう感情的になっていて、敵が冷静に仕組んだワナにはまっていたのである。他の將軍たちも心に油断を宿していた。

男依大將軍は、まず定石通り早朝に騎馬隊で中央突破し敵を分断する。敵がちりちりになったところに騎馬隊が引き返して来て歩兵隊と挟み撃ちをして叩き潰す作戦を選択した。

しかし、男依の不安は夜から霧がどんどん濃く

なってきたことである。霧が濃くなると敵、味方が容易に見分けられず、機動力が武器の大海人軍騎馬隊も早く走れず、本領發揮ができないからである。結果、天は五十君に味方した。

残念ながら朝方になっても濃い霧は晴れなかった。昨夜より一層濃くなり視界を遮っていた。微かに敵のたいまつが昨日と同じような布陣とみえたので、男依大將軍自身が騎馬隊の先頭に立って予定通り対岸の近江軍に向かって川を密かに渡り攻撃を開始するつもりでいる。その前に、
「皆の者よく聴け。今回の敵は近江朝の精鋭部隊である。大將は軍略でもこの国随一の犬養五十君將軍である。これまでの戦いで諸君らはよく働いてくれた。しかし、今度の敵はすこしばかり手ごわいと思う。今回の我らの作戦は、敵の中央を突破し敵部隊の分断を計り、その混乱したところに騎馬隊が反転して前後から攻撃を加え壊滅に追い込む作戦である。この濃い霧の中、赤いタスキが味方の目印となるであろう。こころして攻撃してほしい。

高市総司令官の指揮下の5千は申訳御座いませんが待機をお願い申し上げます」
「よしわかった。じっくり戦ぶりを見せてもらおう」と高市皇子は同意した。

〈安川の開戦〉

この濃い霧の中、大海人大王軍は早朝6時に安川を渡りだした。

しかし、意に反して対岸に渡りきる前から、敵はどんどん攻撃してくるかと思いきや少々の小競り合いぐらいで奥へ奥へ退却していくではないか。
「この腰抜け者め!恐れをなしたか。皆の者どんどん追い詰めろ」
と男依大將軍は命令した。それでも相手は小競り合い程度の攻撃しかしてこない。この時である。厭な予感が的中した。

敵のわなにまんまと嵌ったことに気づいた。陽動

戦法である。まんまと引かかかったと気付いたときには、すでに敵陣中に深入りしすぎている。

男依がすぐさま反転して攻撃を命じて引き返えそうと思ったときには、3万の自軍は敵に完全に包囲されていたのである。この濃い霧のために潜んでいた近江軍の横を通りすぎてしまっていたのである。まんまと誘きだされてしまった。

この機を逃さず近江軍の大將、犬養將軍は四方八方からの矢の攻撃を命じた。男依は、
「しまった。計られた!」

来た方向さえ判らぬほどの濃い霧である。男依は全滅も覚悟せざるを得ない状況に陥った。大海人大王軍は、敵の360度全方向からの攻撃を受け、こちらは敵の姿が見えずどこから矢が飛んでくるかも掴めず、大混乱となり逃げ出すものが続出した。周りの死傷者はみな赤のタスキをした味方ばかりであった。四方八方から矢が飛んでくるので、濃い霧の中、ばたばたと倒れてゆくのは味方ばかりであった。まさに地獄の修羅場と化していた。

高市総司令官の「油断するな!」の言葉が脳裏をかすめた。自分の無力からおきた大失態である。男依はこの濃い霧の中で死を覚悟し必死で戦ったが、四方八方から飛んでくる矢の雨、退却方向さえわからず、男依自身も腕と足に矢がささっており、もうほぼ力尽きようとしていた。

そのときである。神の降臨のごとく高市皇子軍が、敵の囲みの一画を突き崩すように出現したのである。
「男依!こちら方へ退却だ。総退却のドラを鳴らせ。退却せよ。無駄死にするな!」

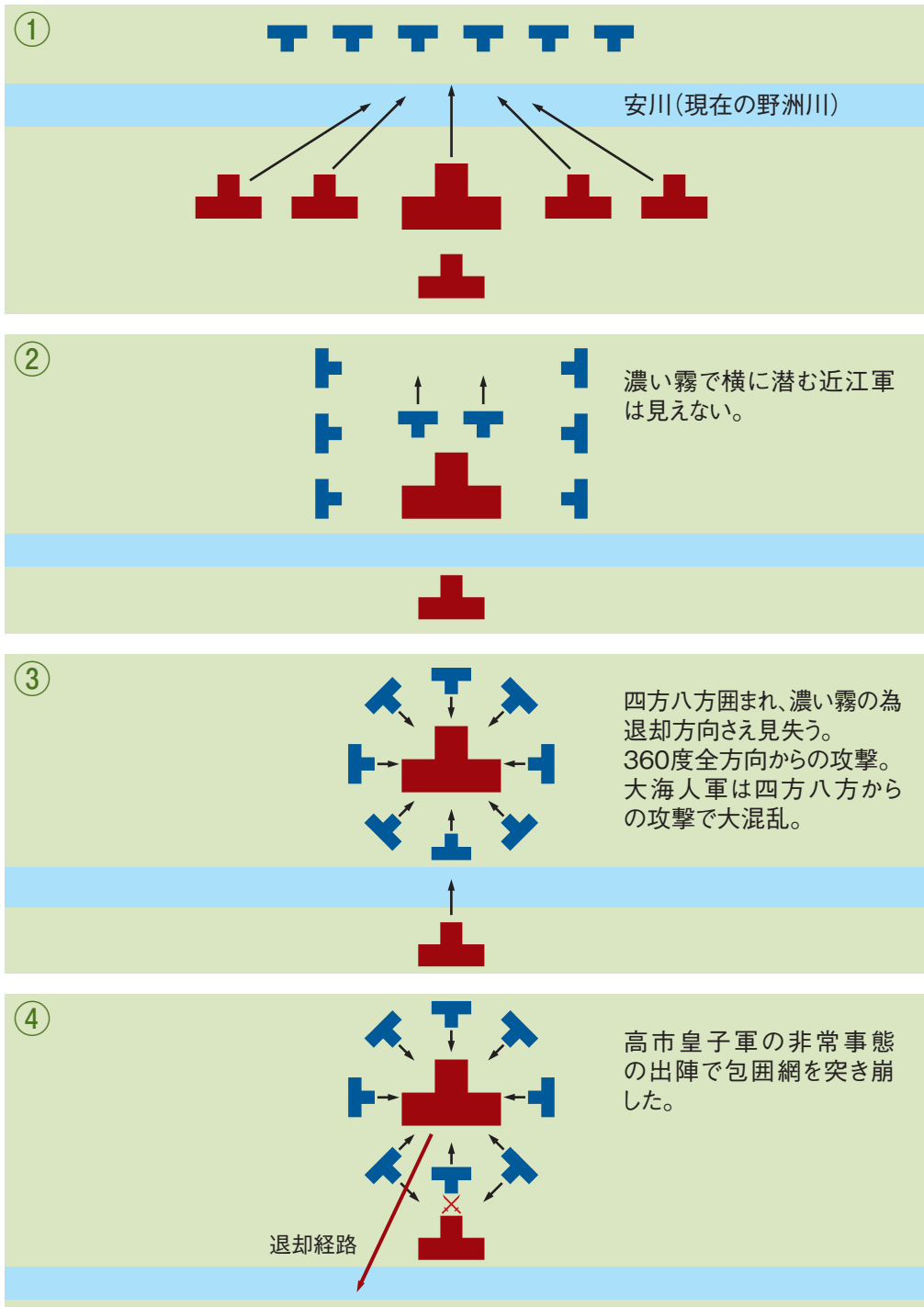
と高市総司令官は男依大將軍に命令した。大海人大王軍は突き崩された一画の隙間を、ドラで示して一斉に退却した。この作戦は霧を巧みに使った戦法である。今回は大海人大王軍が大敗北を喫した。1万人程度の味方を死なせてしまった。

男依は高市総司令官に近づき、下馬して九死に一生のところをお助けいただいたお礼と、自分の大

図4 安川畔の戦いの推移

近江戦線

近江軍 大海人大王軍



失態で大海人大王からお預かりした兵をたくさん死なせたことに対して、平伏して涙ながらに謝罪した。高市総司令官は、
「男依。戦いはまだ終わってはおらぬ。大將軍がそのようなことでどうする。それこそ不忠というものぞ。敵もこの濃い霧の中では、川を渡ってはこないであろう。各部署の將軍は陣形を整えよ」と命令を發した。

男依は、再度陣形を立て直した。その時、幸運なことに霧が少しずつ晴れだしてきていた。犬養將軍の率いる近江軍が、わが岸からも見え出したのである。もうすでに敵は陣形を整えていた。敵はほぼ無傷である。男依はさすが軍略に長けた犬養將軍敵ながらあっぱれと思うと同時に身震いがしてきた。不思議と大海人大王に捧げたわが命、死を賭けても良いほどの国随一の軍略家、犬養五十君大將軍と戦えるよるこびが沸き出てきていた。兵力はこの敗戦でほぼ互角になっていた。

午前9時頃、総力戦で安川を挟んで戦闘が開始された。勝負は互角でなかなか勝敗の目途がつかなかった。両軍ともせめぎ合いが続き、膠着状態が2時間程続いていた。

犬養將軍は兵を少人数のゲリラ部隊に分け、神出鬼没の作戦に出てきた。どこからとも無く攻撃してくる近江の小部隊は、大海人大王軍を苦しめじりじりと大王軍は退却に追い込まれていった。もう午後1時を過ぎようとしていた。敵のゲリラ戦法のために大海人大王軍は組織的な攻撃ができず、一旦総退却を考えていた。

この時である。神のご加護としか思われぬ事態が起こった。近江軍の背後に飛鳥防衛軍である第二軍が現れたのである。紀阿閉麻呂を大将とする第二軍である。飛鳥から駆けつけた5千ほどの兵たちである。あの多品治、置始兔等の姿もみえた。犬養將軍にとって背後から敵がくるのは想定

外であり、挟み撃ちになる可能性がでてきた。犬養將軍はただちに全軍に退却命令を出した。犬養將軍は、

「背後の敵とは戦うな。戦っても無駄死ぞ。ひたすら固まって大津方面へ退却せよ」

と言い放つや阿吽の呼吸で1万5千の兵が怒涛のように退却したのである。さすが精鋭部隊。犬養將軍の意思通り末端の兵まで逃げの体ではなく、氾濫川のごとく一塊となつての退却に対して、第二軍は手も出せず道を空けてしまい呆然と見守るしかない状況であった。

敵は余程訓練されている。‘敵ながらあっぱれ’と男依は不謹慎だが思った。犬養將軍の采配ぶりは見事で、戦う前から先を読んでいて、即断即決したことはすばらしい。負けていないのに退却するのは、たいへんな勇気のいる行為である。目前の敵を前にして引き揚げるとは、なかなか並の將軍にはできないことである。男依はこの引き際の潔さに改めて自分以上の軍略家をみた気がした。

辛うじて勝利した男依のもとに、多品治や置始兔が近寄ってきた。多品治は、
「男依大將軍、大丈夫ですか。敵は退却しましたぞ。無事でよかった、よかった」と褒め称えてくれたが、男依は笑顔を取り繕うのがやっつとで、敗北感に苛まれ放心状態で突っ立ったままであった。

飛鳥部隊第二軍の到着が少しでも遅れていたら、負けていたかもしれない。あの戦法はいままでに見たことがなかった。ゲリラ戦法は余程訓練された兵にしかできない芸当である。軍を少人数に分けるといふことは、その小集団ごとに指揮官が存在することを意味している。その時々状況に応じた判断ができる指揮官が多勢いることである。いままでの戦いのように数に任せての単純な力攻めとはまったく違う戦法である。男依は何とも言いようのない不気味な恐ろしさを感じていた。

しばらくして平常心を取り戻した男依は、高市皇子総司令官にこの戦いの失態のお詫びと犬養将軍の人並みはずれた戦ぶりを目のあたりにして、犬養五十君という男について知りたくなったことを告げた。「彼のことを知りたくなったか。さもある。天智天皇と同じく父大海人大王も彼には一目置いていた。しかし、宮使いの連中からは全く生意気な奴だと言われている。もっとも戦では役立たずの事務屋の役人どもの言い草だろうけどな。わあはあははは……」

犬養五十君という男を天智天皇は可愛がっていた。天皇の人を見抜く目に改めて高市皇子は敬服した。晩年の頃を除けば、天智天皇はやはり只者^{ただもの}ではないと改めて確信した。

——話は脱線するが歴史は繰り返すものである。秀吉も晩年は目が曇ったためか、豊臣家の悲劇の火種をつくっていたのである。

秀吉が天下人として君臨するには、奸人家康^{かんじん}を懐柔するのではなく滅ぼしておかなければならなかった。朝鮮に攻め入る前に家康を死に追いやっておかねば本当の意味での「天下様」とは言えない。家康との戦である「小牧・長久手の戦い」で和睦などせず、徹底抗戦して家康を抹殺しておけばよかったのである。

秀吉は表面上でもよいから、はやく「天下様」と呼ばれたかったのであろう。勝つためには長期戦になることは必定。秀吉の高年齢がところを和睦に向かわせた。しかし、自分の亡き後、豊臣家の力に匹敵するほどの家康を生かしておいたのはまずかった。やはり豊臣家に軍師不在であったのが災いしたのであろう。竹中半兵衛ならば「長期戦になってもやらねばならぬことは、やらねばなりません。必ず、後々の災いとなります」と主戦論を主張したであろう。その竹中半兵衛という武将は、無欲がゆえに家康の本心を見抜いていた。しかし、残念ながらこの時期には半兵衛は、すでに病で死んでこの世にいなかったのである。秀吉は「裸の王様」になっていたのだ。

〈栗太の戦いとその他の戦線〉

大海人大王軍は、あらためて進軍するまでの5日間を休養と負傷者の手当て兵糧の補給等で費やさざるをえない程の手痛い損傷を受けていた。

男依の親友の多品治は、「大海人大王軍の精鋭主力部隊がこれほど損傷を受けるとは敵もやるもんだ、男依!」

男依は笑顔で、「わしは、いいことを学んだ気がする。実はあの犬養将軍と酒でも酌み交わしてゆっくり語りあかしたい気分^{ゆえ}でいる。故あって、このたびは敵味方に分かれて戦ったが、彼は今後の倭国に必要な人物だと思っている。

高市皇子から大海人大王も一目置いている人物と聞いた。理屈ばかりわめく役人の受けは悪いそうだが、五十君には、信念があり智恵がある。処世術のみうまい役人どもとは合わないはずだ」

多品治は、にこにこ笑顔をうかべて、「男依がそこまで惚れ込んだ犬養連五十君とかいう将軍、わしも一度逢ってみたいものだなあ」男依は続けた。

「軍組織をあのように手足のごとく使いこなせる手法を窺ってみたいのだ。今回の陽動作戦といい、ゲリラ部隊の神出鬼没の動きといい、いままでの戦いでは見たことがない。以前、大海人大王からこういう話をお聞かせいただいたことがある。

とかくトップは側近の讒言^{ざんげん}に左右されやすいものだが、兄者(天智天皇)は他人の目でみた意見は信用しなかった。必ず自分で診たててその人の人間力を、自分の目で判断していたお方であった。これだけは人に任せることはなかった。斬り捨てる事は誰にでもできる。人は活かすものであり、その者の特性を活かせない上司こそ失格であると、大海人大王から教えられたことである」

男依は大海人大王の眼力に改めて敬服した。

図5



5日間の休息の後、やっと進軍ができるようになった。大海人大王軍の勝利をみて、各地から豪族が参陣してきた。それで兵力は盛り返し4万5千程に膨れあがっていた。

現在の草津・守山・大津市の東側を進撃し、旧暦7月17日(新暦9月3日)近江国庁に到着した。大海人大王軍は、ここ瀬田川東岸の近江国庁に本営を設けた。瀬田川河畔まではほぼ1キロ半程の位置になる。

また、近江軍の主力部隊は瀬田橋の西岸の園山に本営を置き、瀬田橋を挟んでの睨み合いとなった。

ここにきて、はじめて大海人大王が美濃より到着した。軍の士気は一層高まり近隣の豪族はすべて大海人大王軍に参陣してきた。さすが天智天皇の下で数々の戦いを指揮し負け知らずの大將である。その姿の威厳と凛々しさには、敵を動揺させる力があつた。

一方、琵琶湖西回りの第四軍である出雲^{いずもの} 狛^{こま}と羽田^は矢^や国^{くに}は、ほぼ戦いらしいものはなく三尾城での戦いで多少の小競り合いがあつたものの、3千の精鋭部隊はほぼ無傷のまま大津京北の郊外で待機していた。

〈瀬田川の合戦前夜の軍議〉

大海人大王軍は、近江朝宮殿が一望できる近江国庁に本営を構えた。大海人大王も久しぶりにみる近江朝に、若き日々の額田王との思い出などが走馬灯のように頭の中を駆け巡っていた。

兄(天智天皇)と共にこの近江に遷都し、立派な宮殿や伽藍の造営を自ら指揮した大海人大王にとって、それを自ら消失させることは断腸の思いであつた。宮殿に残してきた皇女^{うねめ}や采女^{ぬかた}たちは、どうしているだろうと心配でならなかつた。何としても助けださなければならぬと考えていた。

大海人大王は、このような琵琶湖にかかる夕日の美しさを見たのは、なぜだか遠い昔日のような気がする。今は兄者である天智天皇の妻になっている額田王^{ぬかた}は、かつては、私の妻であつた。その時のロマンスはいまだに鮮明に覚えている。なんとなく戻れるものならあの頃に戻れたらとの悲しい気持になつていた。

〈瀬田川の戦いの前夜〉

そこへ高市皇子総司令官がやってきた。「父上、今から軍議を開きます。各将軍は全員すでに控えておりますので、お越しくださいますようお願い申し上げます」

そして、軍議が始まった。まず、男依大將軍が口火をきつた。

「各将軍もわかっておろうが、この瀬田川の決戦が最終決戦となるだろう。敵兵力2万、我が軍は4万5千である。兵力には勝るが、いかにしてこの瀬田川を渡るかが問題だ。それに、敵が攻めてくるというのに瀬田唐橋^{せたのから}が破壊されていない。定石からすれば瀬田唐橋を破壊しておけば、戦略上も近江軍も有利になり我々の攻撃を遅らせることができる。わざわざ破壊していないということは何かカラクリを仕掛けてあるにちがいない。知将、犬養五十君は健在である。彼が何かを考えているにちがいない。あの安川の戦いの軍略は敵ながら見事というしかない戦いぶりであつた。彼が初歩的なミス^おを措かずはずは絶対にない。

瀬田川の河口ということもあり、この戦いはいままでの犬上川、野洲川^{えち}、愛知川などと違い、川幅250メートル、川の深さも3メートルから深いところでは5メートルはある。騎馬でも徒歩でも渡れない状況である。20名乗りの高瀬舟で渡ろうものなら、敵の2万の兵が放つ矢で対岸に着く前に、わが兵はハリネズミのように射抜かれて無駄死することになるう」

男依は疑心暗鬼になつていた。三輪子首^{みわのこびと}が、「上流まで兵を移動させ、川幅が狭くなる場所で渡河させてはいかがか」

多品治は、「いや、それは無理だ。川幅は数キロ先まであまり変わらない。そして、こちらの軍勢は4万5千だ。これほどの大軍を狭い道無き道をそう簡単には動かせない」

将軍から数々の戦術の提案があつたが、これという決定打というべきものはなかつた。しばらく沈黙が続いた。大伴吹負は、

「われわれが特攻隊となり先陣を努め攻撃すれば、瀬田唐橋の仕掛けはわかりましょう。この大伴が捨石になりますゆえ先陣を仰せつけくださいませ」

男依は、

「それはできぬ。大伴氏は由緒ある家柄、そのような危険な役目は許すことはできぬ」

大海人大王はにこにこしながら各将軍の意見をじっくり聴いていた。そのうえで、ゆっくりと話した。「この近江朝の区割り、宮殿、寺社の伽藍等々、兄の天智天皇からわたしが総責任者を仰せつかり、短期間での都作りであったため苦労したものだ。防備上も重要課題であった。この瀬田川も大きな防衛ラインであり、橋を破壊すれば東方からの侵略は渡河しない限り無理である。

しかし、この250メートルの川幅と3メートル以上の水深は天然の要害となっている。当初よりこの瀬田川を制した者がこの戦いを制すと思っていた。それがわが軍に振りかかるとは、夢に考えていなかった。皮肉なものだ」

男依は、

「大王さまに従ってこの近江宮を建造したこと、今でもよく覚えております。自ら近江京を建造され、皮肉にも自ら破壊することになるとは、お心苦しい大王様のお気持ちお察し申し上げます」

大海人大王は、

「敵の頭目は左大臣蘇我赤兄(注14)と右大臣中臣金(注15)である。共に文官出身だ。二人は私や高市皇子のように、兄者(先帝天智天皇)と一緒に有力豪族との戦において、矢や槍が飛んでくる悲愴な戦いを掻い潜ってきた経験がない。戦場の身震いする恐ろしさ、惨たらしいその現場の雰囲気もしらない現場知らずの文官官僚である。

しかし、口だけは達者で純真な有馬皇子を自ら謀反に誘い入れておきながら、そのことを兄者に密告した張本人である。騙し打ちと同様である。自分が認められるなら人を陥れることなど何とも思わぬ非道者である。自分の出世ばかりを考えている計算高いケダモノ。恥ずべきである。こんなことは、実際敵の矢を掻い

潜ったものしかわからぬことじゃ。いつも心地よい言葉や待遇に騙されて取り立てた兄者も兄者である。

息子のこととなると冷静であり賢人の誉れ高き兄者でも目が曇ったのは自業自得である。左大臣蘇我赤兄も右大臣中臣金も、自分の保身のため、大友皇子を天皇にする意向の兄者に近づきイエスマンを演じきった大奸である。兄者らしくない人事である。大友皇子を天皇にする支持者を増やすための布石人事であることはあきらかである。しかし、それが本当に大友皇子にとってよいことなのか。部下の傀儡となり不幸になる危険すら孕んでいることも、兄者は考えたであろうか。

ボスが変わると、部下の態度が豹変する歴史は良くある話である。利で動く者は利で裏切るといわれる由縁である。近江軍の中で、犬養五十君だけは骨のある武将の中の武将といえる。瀬田唐橋を残してあるのも、なにか五十君の策略があるに違いない。よいか。蘇我赤兄と中臣金だけはぜったいに許さぬ。必ず、首を持ってまいれ」

男依はじめ全将軍は、温厚な大王がこのように怒りをあらわにすることはあまりないので、内心驚いた。唐や新羅に対処せねばならない大事な時期に倭国人同士が無駄な戦いをしていることへの怒りであろうと思った。

全将軍が、大海人大王の前に平伏した。そして、全将軍が身を乗り出して大海人大王の話を一言残らず聴き漏らすまいとしていた。大海人大王は、当初からこの瀬田川をいかに渡るかを美濃の野上に滞在していたころから考えていた。

多品治は、

「大王様は、われわれがここまで勝ち進むことは当然と読んでいらしたのですか……!」

「戦い方も知らぬやつら、なにができよう。そのうち、二人は本営からも逃げ出すであろう。ところで本題に入る。よく聴け。これは命令だ。瀬田川は琵琶湖の河口のため川幅は広いが川の流れはほとんどない。

そこで、密かに和爾部臣君手(注16)と近江の豪族

胆香瓦臣安倍^(注17)に当初より20人ぐらいの乗れる高瀬舟を尾張、美濃、琵琶湖周辺の漁師の舟を数ヶ月かけて3百艘程買い付けたり造らせたりしておった。なぜだと思うか?男依」

「う〜。3百艘による一斉攻撃でしょうか?」

大海人大王は話し続けた。

「敵も2万近くの兵力をもっている。一斉攻撃をくらえば我らは対岸に着く前に全滅しよう。」

わしは、当初よりこの瀬田川の渡河が、この戦いの最大の問題点と考えていた。それはわしが遷都を兄者から任された時、都の防衛として川底を深く3メートル以上に掘り下げて、騎馬軍の渡河を阻止するために意図的にしたものだからだ。これを打ち破る方法はこの河を設計した者しかわからないだろう。

この解決法は、舟を3段以上縦に並べて広い舟の甲板をつくるしかない」

男依は、いぶかしげに尋ねた。

「この男依、まったくわかりません。我々はいかがしたらよいのでしょうか」

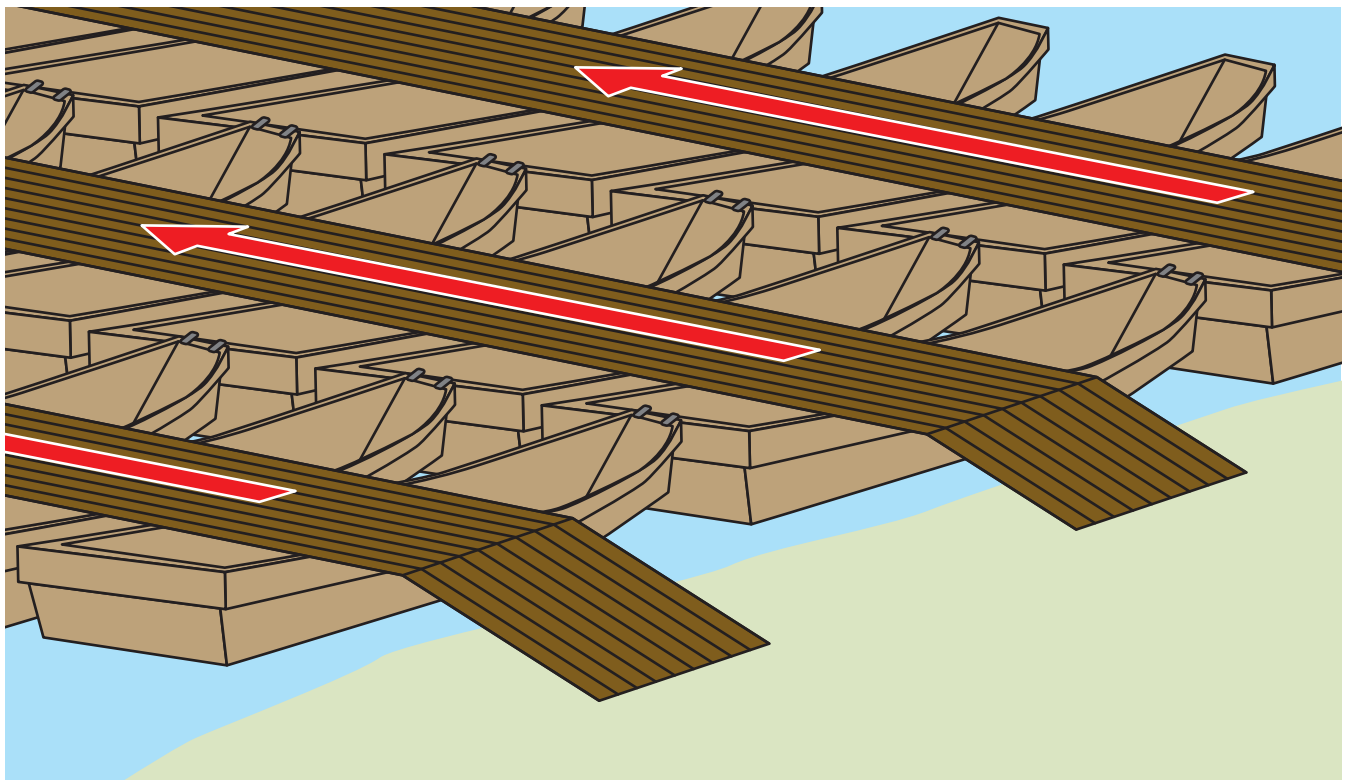
「一艘の高瀬舟の幅は2.5メートル程ある。百艘の舟を横に並べてそれぞれを杭で繋ぎ横に板張りをし、騎馬が2頭走れる橋を作るのじゃ。この舟の橋を3列つくり、まず騎馬隊がその舟橋を一気に駆け抜けよ。そして、敵の前線部隊を殲滅せよ」

男依は、

「大王様のお言葉ですけれど、今から舟を集積し、さらに板を調達して舟同士で繋ぐとなる相当の時間が必要かと思いますが?」

「それは心配いらぬ。すでに和爾部臣君手と胆香瓦臣安倍に命じてある。もう上流で密かに、漁師から買い付け、造らせており、もう完成しておるのじゃ。夜の内に密かに上流からこの河口まで流しておけ。和爾部、わかったな。朝になって犬養五十君がこのような橋を見たら、さぞかし腰を抜かすであろうよ。」

図6 高瀬舟を利用した橋



わあはあはあはあ」

「この男依。考えも付きませんでした。さっそく手配いたします」

「男依待て! 敵にさとられてはならぬ。後は和爾部と胆香瓦に任せておけ。全軍は明日5時に攻撃を開始する。お前はいつものように平静を装え。兵にも密かに作戦の徹底をしろ。そして、寝たふりをしてたいまつはすべて消すのだ。敵に舟橋を悟られてはならぬ。よいな」
「はは〜」

高市皇子も笑顔で男依を見ていた。

〈瀬田橋突破と近江軍の崩壊〉

7月22日、早朝午前5時。戦闘が開始された。高瀬舟の橋は3対。騎馬隊の第一隊長は、大伴吹負将軍以下1500騎。

第二隊長は、置始兎将軍以下1300騎。

第三隊長は身毛広将軍以下1300騎。

まず、ドラと鐘を鳴らし威嚇し騎馬隊が3対の舟橋を渡りだした。その後を歩兵部隊が続いた。寝起きを奇襲された上、この轟音と昨日までなかった橋を見て近江兵は一斉に逃げ出した。

近江軍の先陣となって守備をしていたのは、智尊将軍である。智尊は「何事だ。報告せよ」

と家来に問いかけながらも、昨日までなかった舟橋が3対見え、大海人大王軍の騎馬隊がもう渡りきろうとしている光景を目の辺りにして、愕然とした。騎馬隊は近江軍の野営のテントに火をつけ、近江軍はふいを突かれたため逃げるのが精一杯の状況であった。

智尊は自分の兵がどんどん戦線離脱し逃げるのを必死で食い止めようとした。

「ひるむな! 持ち場に戻れ」

と命令してもまったく従う者はいなかった。そうこうしている内に、智尊自身が囲まれていた。

「おのれ。この智尊に向かってこい!」

と鬼の形相で薙刀を振り回し30人ほどは倒したも

のの、体じゅう矢で蜂の巣のように撃たれていた。最期に馬上より吹負が、

「我は、大伴連吹負だ。我的手にかかって死ぬること誇りに思え」

と言った時に放たれた矢は、智尊の額から後頭部にかけて貫通していた。智尊は後ろ向きに大の字に倒れた。即死した。

これに呼応するかのよう、近江朝の宮殿の数々の方角から火の手があがった。出雲狛、羽田矢国たちが、皇女、女官、采女を救いだした証しであった。近江朝の北に待機していた出雲狛と羽田矢国に、大海人大王から当初より厳命がくだされていた。

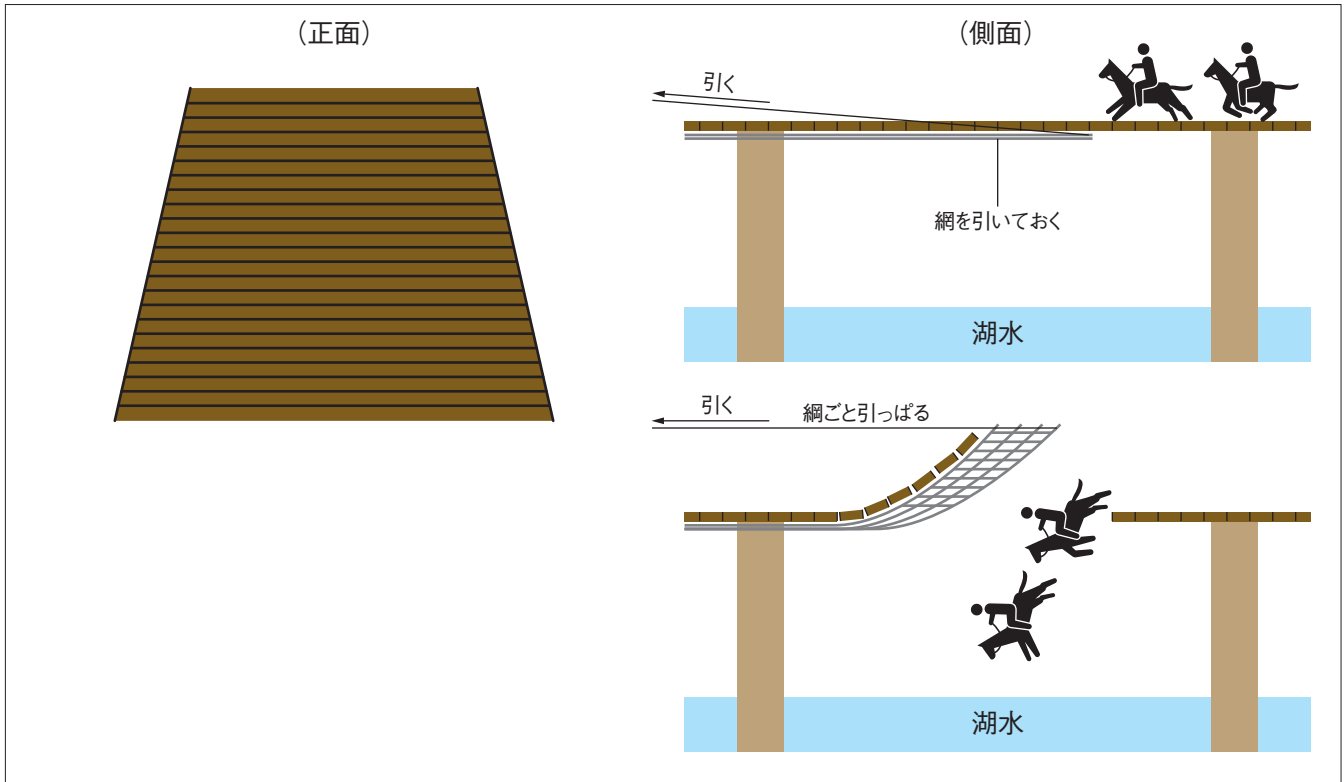
「近江軍を瀬田川沿いに引き付けさせる作戦をとる。そこでお前は手薄になった近江朝に残されている皇后や女官など身分に関係なくお救いし、安全な場所にお移しせよ。そして、一般の民だろうが敵兵の家族だろうが同様に安全な場所に移し終わったら、宮殿や政庁に火を放て。よいか狛」
と直々のお言葉いただいていたのである。

紀阿閉麻呂を大将とした園山の本営を犬養五十君将軍が守備していた。瀬田橋のカラクリを考えたのはやはり彼であった。

そのカラクリとは、橋板の下に網を敷き、綱で網をくくりつけ大海人軍の騎馬隊が橋の中間あたりまで着た時、綱を引いて騎馬ごと兵を瀬田川に落とすものであった。そして、相手が川に落下したあとは、兵2人ほどでまた元通りに橋板を戻すカラクリであった。実に単純な仕掛けであった。

男依大將軍は瀬田唐橋が破壊されているという前提で舟橋をすでに開戦直後から調達していたとは、さすが大海人大王であると思った。ここが戦いの正念場として認識して地理、地形を知っていないと思いつき準備はできないと思った。大海人大王の軍略家としての才能は天智天皇を凌ぐものがあるのを感じていた。

図7



このとき、宮殿が燃え出したのである。それを見て、近江兵たちは自分の家族を守るため戦線離脱が相次ぎ「戻れ、戻れ！」叫んでも命令に従う者はなかった。

五十君将軍を呼ぶ声がきこえた。彼が声の方向をみると、村国男依大將軍が馬上にいた。自分一人が完全に包囲されていた。

「男依よ。勝ち戦さでよかったな。わしも君の運の強さには敵^{かな}わなかった」

「何をおっしゃる。安川河畔の戦いでは、私は死にかけました。軍略家としての差を感じ入りました。あの戦いは完敗でした」

「なにをおっしゃる。あの時はたまたま運よく作戦が成功しただけのこと。最後は退却^{ぶご}という無様な戦いであった」

「五十君殿、これから一緒に新しい国づくりを手伝っていただけませんか」

「何！わしの命を助けるとも言いたいのか」

「私はここであなたを失いたくないのだ。これから、大

海人大王とともに国づくりにご協力を願いたいのじゃ」「だまらっしゃい!!わしも武人のはしくれ。敵に温情など受けて生き延びようとは思っておらぬ。たわけ者」「倭国には今、人材が足りませぬ。おぬしのような知恵者が必要なのだ。わかってくれ」

「だまれ、だまれ男依。人材を失っただと。しゃらくさい。おぬしが多くの人材を死なせたのではないか。ばか者。何を言うか」

「かもしれぬ。だからこそ五十君。お前が必要なのだ。わかってくれ」

「わしは天智天皇を尊敬している。先帝を裏切るわけにはいかぬ。男依、刀を抜け。さしで勝負しろ。男依それでも男か」

男依は、無念ではあるが説得を断念した。男依は家来に、

「何があっても一切、手を出さな。武人としての真剣勝負である。わしが殺されてもこの犬養五十君殿に

手を出すな。必ず逃がせ。よいな!」

お互い目と目で睨み合い一瞬の静寂が流れた。まず、最初に五十君が男依の額めがけて斬り込んできた。そのときはなんとか男依は刀ではじき飛ばした。男依は大男であるが、五十君も剣の振りは速かった。男依が少々ふらついたところを、五十君は透かさず斬りこんできた。その時無心に男依は五十君の胴を斬り抜いた。五十君は、口から噴水のごとく血を吐きその場に倒れた。男依の勝ちである。

しかし、男依は五十君に近寄り「死ぬな」と叫んだ。五十君は男依に抱きかかえられながら笑顔を浮かべて、「あとは頼む。男依!」

といて絶命した。男依は、「五十君。お前は本当のばか者じゃ」と叫び男泣きをした。

近江朝の宮殿、寺の伽藍、すべてが琵琶湖から吹き付ける風にたいそうな勢いで燃え上がっていた。園山に本営を構えていた大友皇子は燃え盛る宮殿を見て、妻である十市皇女は大丈夫だろうかと心配であった。本来、蘇我赤兄や中臣金にそそのかされて始めたこの戦さ。こんな状況で終焉しようとは思ひもしなかった。

大友皇子は赤兄や金の近江軍が優勢に勝ち進んでいるとの報告を鵜呑みにした自分が情けなかった。

赤兄は偵察に行ってくると言って戻ってこない。中臣金も宮殿を守ると言い残して行ったきり戻ってこない。大友皇子のそばの下士官クラスの者しか残っていなかった。

男依大將軍は、敵の本営のある園山の攻撃を命令した。そして、

「大友皇子を殺さず必ず生け捕りにせよ」と厳命した。しかし、園山の本営は既にもぬけのからであった。中臣金は敗走途中で捕まり、男依大將軍のもとに引き出された。さっそく、「大海人大王にご報告して処分の指示を貰ってまいれ」

と下士官に命令した。男依は中臣金に向かって「お前のようなやつに騙された大友皇子がお気の毒だ」金は、

「右大臣 中臣金であるぞ。無礼者」と怒り心頭で叫んだ。

すぐに高市皇子全軍司令官が到着した。「中臣金よ。私利私欲に目がくらみ、若年の大友皇子を貶めたこと許し難し。即刻首を刎ねよ」このときになって、はじめていままでの勢いはどこへやら中臣金は泣きながら、「高市皇子様命ばかりはお助けください。お願いでございます」

涙ながら命乞いをした。高市皇子は「ばか者!」と一言言い残して馬上の人となった。

その後、中臣金は首を刎ねられさらし首となった。鳥が肉を食べ骸骨になっても街道に放置された。

その3日後、蘇我赤兄も捕らえられ同様に処刑された。大海人大王は、「なんとしても生きて大友皇子を探し出せ。皇子に対する無礼な振る舞いはこの大海人がけって許さぬ」しかし、全將軍が血眼になって探したが見つからなかった。

一方、大友皇子は一時、舎人の勧めで大和に落ち延びようとしたが、自らの判断でそれを止めて園山に戻った。そして舎人の物部連麻呂に大海人皇子宛の一通の書状を届けさせた。それは天智天皇の長子らしく死を迎えさせてほしいとの願文であった。

大海人大王は、この願いを受け入れた。男依大將軍は園山の包囲網を緩めさせた。静かな時間が流れた。つぎに舎人物部連麻呂が姿を現したときには、皇子は首だけの無残な姿になり、布につつまれ麻呂の腕の中にいた。

首実検が行われたが、それはまさしく大友皇子その人に間違いなかった。大海人軍のどの將軍も、それを正視しうる者はなく、哀れで涙を流さぬ者はいなかった。

- (注1) 大友皇子…天智天皇の唯一の皇子。しかし、母親が召使の伊賀采女宅子で身分が低かったため、皇位継承権自体が慣例で認められてなかった。なぜならば、大友皇子が天皇に即位した後、大友に子が無い場合召使の宅子が天皇になる可能性がでてくるからである。有力豪族から見れば、召使に頭を下げることになる結果となり、プライドにかけても承諾できかねることだったのである。反乱の種はまかないように配慮されていた。大王の神話説をも否定することにもなるできごとなのである。
- (注2) 中臣鎌足…のちの藤原鎌足。元々、中臣氏は朝廷の神事を司る家柄で政治には本来関われないため、中大兄皇子に朝廷の勉強塾の師匠南淵請安を介して近づいていった。バランス感覚に優れた才気に優れていた。中大兄皇子は人を診る目は鋭かった。彼が居なければ「大化の改新」などは無かったであろう。後に藤原姓を天智天皇から賜り、平安時代の藤原道長などの藤原氏の始祖となった。
- (注3) 中大兄皇子(天智天皇)…西暦626年誕生。後の38代天智天皇。第34代舒明天皇と第35代皇極天皇の子。皇后は異母兄である古人大兄皇子の娘倭姫王。蘇我蝦夷、入鹿の蘇我氏の本家を滅亡させた。親密国である百済が唐と新羅の連合軍に滅ぼされたため、白村江で唐と新羅の連合軍と戦ったが、大敗北を喫し国力を低下させ、かえって地方豪族の不満を助長させた。大津に遷都とし、「大化改新」をはじめた。
- (注4) 大海人皇子…西暦631年誕生。後の40代天武天皇。皇后は鶴野讃良皇女(後の持統天皇)。天智天皇の長女大田皇女、次女讃良皇女を娶る。兄天智天皇と同じ両親から生まれる。天智天皇の子、大友皇子と皇位継承をめぐる「壬申の乱」が勃発し、勝利の上40代天皇となる。今の日本の統治機構、宗教、歴史編纂等がこの時期に定まる。これを白鳥文化という。日本を国号とした最初の天皇である。兄の始めた「大化改新」を完成させた。天皇の力が一番強い時期であった。
- (注5) 太政大臣…日本独自の官職。大友皇子が最初の大臣。第2代には高市皇子が就任。ナンバー2で、すべての国政を掌握する。
- (注6) 軍師…君主を補佐して軍を指揮する官職。中国の三国志の「諸葛孔明」は特に有名。戦いに勝つ作戦参謀であり武官が任命された。国の存亡も軍師次第と言われる。先見性、兵法、人間力、すべてに優れていなければならなかった。トップが鋭い洞察力を持ち合わせないと優秀な軍師と判断できないところがある。指示待ち人間や自分の肩書き、出世をこだわる人間は、素質そのものに対し不適正である。日本では竹中半兵衛、黒田官兵衛、山本勘助等々、有力戦国大名には立派な軍師が存在した。
- (注7) 大伴吹負…大伴家は代々朝廷の警護を任務とする名門豪族。物部氏、蘇我氏と並び称される。
- (注8) 大野果安…大友皇子の軍の将軍。大和奈良山の戦いで大伴吹負と戦い勝利した。しかし、本来の目的である天智天皇が飛鳥の倉庫に外敵から守るため備蓄していた武器、弾薬、兵糧米を取り返さずに帰還したので解任された。
- (注9) 壱岐韓國…大野果安とともに大伴吹負と当麻で戦い勝利したものの、命令の真の主旨が伝えられてなかったため、飛鳥の武

器、弾薬、兵糧米を取り返さず帰還しようとしたが、第2軍と合流し勢いを復活させた吹負の反撃に会い戦死。

- (注10) 三輪高市麻呂將軍…奈良盆地の三輪山麓を本拠とした氏族で、大神氏から大三輪氏にわかれた。家柄は古く「大物主神」を崇拜しており、天皇家の祖神天照大神を崇拜できず「壬申の乱」後、朝廷から疎んじられた。
- (注11) 高市皇子…天武天皇の長男。しかし、母親が低い身分であったため皇位継承権はない。しかし、中大兄皇子(天智天皇)や実父である大海人皇子(天武天皇)とともに、大和朝廷に従わない豪族を戦いによって滅亡させることに貢献しており、歴戦の武人である。持統天皇の時代には太政大臣として「大化改新」に貢献した立役者である。
- (注12) 犬養五十君…近江軍の軍師。中大兄皇子(天智天皇)と伴に、敵対する有力豪族を大和朝廷の参謀として作戦を実行した。しかし、喧嘩は強いが文官の作成した定めを守らず自由気ままに振舞ったので、官僚には嫌われていた。天性の武人であり義理堅く信念は曲げないところが中大兄皇子に好かれていた。
- (注13) 竹中半兵衛重治…戦国時代の軍師。美濃齊藤家に仕えていたが、領主齊藤竜興が遊興に耽り諫言しても直らなかったので実力行使をしていさめた。信長は羽柴秀吉に三顧の礼を尽くさせて我が家来にと請うたが謝絶したことは有名な話。そのかわり羽柴秀吉の家来なら承諾するとの申し出にやむなく信長は承諾した。
- (注14) 蘇我赤兄…蘇我氏の分家。本家筋の蘇我蝦夷、入鹿を落とし入れた黒幕とも言われている。官職を本家筋に独占され不満はかなり内在していた。口はうまく人を陥れることにかけては優れていた。有馬皇子も味方のふりをして煮詰まったところで中大兄皇子に密告するなど、人間性としてもけって良いとは言えなかった。
- (注15) 中臣金…中臣鎌足のいとこ。中臣氏は元来神事、祭事をつかさどる豪族であった。鎌足が政界に進出してからは政治に関わるようになった。鎌足の腰巾着として出世したが、とりたてての働きはない。
- (注16) 和爾部君手…美濃の豪族。若い時から大海人大王の舎人として仕えていた忠臣。
- (注17) 胆香瓦安倍…高市皇子の舎人で「壬申の乱」勃発時に高市皇子を護衛した。

〈参考文献〉

「美濃路燃ゆ」 渡辺 孝 文溪堂
「壬申の乱」 倉本一宏 吉川弘文館
「壬申の乱を歩く」 倉本一宏 吉川弘文館
「白鳳の嵐」 町田俊子 幻冬舎

(2014.2.14) 共立総合研究所 特命研究員 三矢 昭夫